全体討議

まとめおよび司会　上田閑照

上田　おはようございます。最後のこの時間は大体恒例によりましてまとめということになっております。一応、私がまとめをせよということになっておりますので、試みはしてみたいと思います。

それで、私たちのテーマは「霊性・自然・自己」でした。これは今回と来年の共通のテーマで、それはアメリカでの学会に向けてのテーマでもあるということです。このテーマはもちろん「東西宗教交流学会」という基本的に言えば、キリスト教と仏教の中でなされる、お互いに考えるテーマであるけれども、これは必ずしも仏教とキリスト教の間で直接に出てきたテーマというわけではありません。従来そういうテーマも多かったんですが、今度はやはり仏教とキリスト教と、いろんな言い方がありました、その外とかね、あるいは仏教とキリスト教と無宗教とか、そこまで問題を見る場面を広げて改めて仏教とキリスト教を考え直すという、そういう趣旨であったわけですね。その「広げて」ということだけれども、これはもともとあったんですね。仏教とキリスト教の対話ということがなされる状況の中には最初からそこまで広がる必然性、これはもちろんあったわけですね。

仏教とキリスト教が今まで考えてきたことを相互に交換してお互いに翻訳し合いながら理解するという、そういうことに止まらないんですね。つまり、西田幾多郎の言い方だと、出会いの中でより深い根底を見出して、そして、その根底から自分自身を理解し直すという、そういう意味でのより深い根底を見出す、その努力というふうに考えたらいいと思いますね。そして、そういうことが要請されるのは、仏教とキリスト教の外ということが仏教とキリスト教にとって大きな課題になってきているということがまずあるんですね。そして、実際にはユングのことと鈴木大拙のことがテーマになりました。

しかし、これは、ユングをテーマにする、鈴木大拙をテーマにするということではなくて、共通の大きな課題である

「霊性・自然・自己」を私たちがどう考えるかというときの基本的な手がかりとしてということだったんですね。「ユング・大拙・イン・コンテクスト」という意味です。それにしても、議論されたこと発表されたことは、たいへん複雑ですので、細かいことはお一人お一人でお考えいただくということにしまして、大きなテーマとしての「霊性」、それから「自然」「自己」、その問題がどういう問題なのかということ、それについて大体どういうふうな見通しがあり得るのかということを少し話したく思います。

分かりやすい出発点をとると、まず「霊性」ということですが、たとえば、伝統的にキリスト教で言えば「人間はイマゴ・デイ（imago Dei）である」というふうな言い方があります。あるいは仏教で言えば「すべての衆生は仏性を持っている」というふうなことがあります。ただ、そういうふうにそれぞれに対するときには、それぞれの理解の伝統的な枠組みがあり、その中に言われているわけだけれども、そういう枠組み自体が必ずしもそのまま妥当するものではないという、そういう事態があることで、そこで考え直すということになるわけですね。神のイマゴであるとか、神の子であるとか、あるいは仏性を持っているということで、何か、つまり、人間に関して言おうとしたのか、そこを探ってというか求めるというか、そういうときの導きのことばとして「霊性」ということばがさし当たっては一つの作業仮説のような基本ですが、ただ単なる基本というだけでなくて、それがやはり、神の子であるとか、仏性を持っているというときに意味された人間の理解の中に含まれたものですね。それを何らかの仕方で直接に表現できる、そういうものとして「霊性」ということばが選ばれたというふうに考えていいと思います。

ですから、伝統的な枠組みで言われた「神の子」とか「イマゴ・デイ」とか、あるいは「仏性」ということば自身が妥当しなくなっても、そういうことばで言われたそのこと、それは人間にとって基本的なことであると。その基本的なところを単に抽象的な一般概念でなすのではなくて、人間の存在にある、何と言うか、蝉噪（せんそう）を引き起こすような一種のエヴォカティーフなことばとして「霊性」というのを理解しないと。私自身は、そういうふうな感じがしています。

そういうことが一つ言えると思うんですね。それで、もう一つの問題は、一応そういうふうに「霊性」というふうに言ってみることによって、ある意味では非常に一般的な宗教性のようなものなんだけれども、しかし、それ以上にですね、「神の子」とか「仏性」とか言われたものは、本当は霊性のことを言おうとしたんだということをですね、大きな可能性を持ったことばというか、昔の言い方だと、宗教性Ａと宗教性Ｂという言い方があったんですね。一般的な宗教性と、それから特殊に福音に関わる信仰を示すときに宗教性Ｂというような言い方がありました。それを流用すれば、宗教性Ａの

いわば宗教性Bをも包んだ、その根底になるようなものとしての宗教性A2とでも言うことができるようなものと考えていいんじゃないかと思います。宗教性B1、宗教性B2というときに、そのBを自己に対する独特な伝統的なことばがありますが、そういうことばが妥当しなくなったときに、なおかつ宗教性Bが指し示そうとしたところを示すことのできることば、そういうふうなものとして、私たち流に大きな意味の可能性を含めることができるというふうに思っております。

それで、自然ということが問題になって、どうして自然ということが問題になるかということも、もちろんいろいろあるわけだけど、これは、現在とくに問題になるという問題の出方はですね、非常に人間と自然の関わりにおける否定的な面ですね、それが非常に極端になっていて、その否定面において改めて問題が出てきているということだと思います。肯定面の方で言えば、昨日、奥村さんが非常に適切な、あるいは直接センスに響く例で八木重吉の詩を紹介してくださいました。奥村さん、すみません。もう一度「草の上に坐る」というやつ、どうですか。

奥村　「私の過ちだった、私の過ちだった。こうして草の上に坐れば、それがわかる」。

上田　こうして草の上に坐れば、それがわかると。そのときの草の上に坐るという、そこに自然ということが言われていて、しかし、そのときの自然というのは単なる草でなくて、こういうことがわかるという、そこまで含んで草の上に坐るということですから、ただ自然の中に、自然の中でということとは違うんですね。そういう草に坐る、そのときに言われる自然、それは霊性に満ちた自然というふうにおっしゃったんじゃないかと思いますし、私もその表現は非常に適切だというふうに考えます。草の上に坐るということは、もちろん、ただ草の上というわけではないですね。それは、大地に生えている草ということだから、自然の経験の仕方はさらにもっと大地に広げて事をなすことができると思います。

そういうふうな霊性に満ちた自然だとかいうことと、それから、そういう霊性が失われたような自然と、そういう問題になると思うんですね。だから、自然が問題になるときに霊性に満ちたというプラスの面で、それから霊性が欠けたというマイナスの面で問題になる。つまり、自然というのはもともとですね、いわゆるニュートラルに自然ということが経験されるというよりも、プラスのニュアンスを含んでか、あるいはすっかりマイナスになって経験されるかのどちらかという、そういうことがあるのではないかと思うんですね。

ニュートラルな自然という考え方自身が非常に新しい考え方でもあるためですね。その新しい考え方の一番単純な示し方、それは昨日、堀尾さんが大拙のことばだということで紹介してくださった、飲むと美味い水ということと H2O の問題でしたですね。美味い水というときにはですね、「美味

いなぁ」と言うときには、もうこれは水だけのことじゃないですよね。水を飲んでいるというそのことが、もう存在の全体ということです。「美味いなぁ」と言うときには、自分だけのことじゃなくて、水も含んだ全体、自然全体ですね、自然全体の味わいがそこで味わわれているということがあると思います。それに対して、H2O というのは、美味い水の部分とか要素ではないというふうに言いたいと思います。H2O というのは、ある見方によって見出された一種の断面であってですね。ただ、そういうものの見方が次第に極端に広げられてくることによって自然への関わりかたが全く変わってくるということが起こってきたわけですね。そういう事態に陥っているというふうに思います。そういうふうにして、もともと自然の経験は、霊性に満ちたものかあるいは霊性に欠けたものかという、あれかこれかという形に基本的にはなっているものであって、ニュートラルなような自然というものが発見されるということ自身がある独特の方法によって見出されたものであるということなんですね。そのもともとのところで言えば、その自然から霊性が欠けてくるとですね、それは単に自然だけの問題でなくて、今度は霊性の方にも問題が起こってきます。霊性の方もいわば不自然になって、よく現在、奇妙な意味で言われるところの霊になるのは、霊性と自然が離れるところから起こってくる霊性の方での変質というふうに考えることができると思います。ですから、自然と霊性、これはやはり、浸透し合っているということが本当だというふうに思うんですね。

ただ、それじゃどうして自然ということばだけじゃなくて、霊性ということを言わなければならないのか。自然と霊性というふうに、やっぱりことばとして言わなきゃならないのか、そこがはっきりしないと、やはり事態がはっきりしてこないんじゃないかというふうに思います。霊性と自然、少なくとも二つことばがある。それが一つであるのが本当だとしても、それぞれのことばで強調的にどこを表わそうとしているのかということですね。それがやっぱり、もう一つ問題になると思うんです。

昨日の言い方の中に「自然と超自然とが一つである」という、そういうお話がありました。元来「超自然」ということばが出てくるときには、もちろん自然との非連続ですね、自然と啓示ということを考えられているわけだから。非連続なんだけれども、しかし、その中にもやはりある種の、何と言うかな、微妙な繋がりみたいなものは思想の中ではつかまえられていたと思うんですね。人間にとって啓示であるもの、それは神にとっては神のナトゥーラであるという。そういうことからすると、ナトゥーラということばで両方が言われる。そういう可能性が出てくる。だから、超自然と言うときの「超」ということばはいつもそうなんで、超国家主義と言うときには国家主義のつまり非常に度の高まったものですよ。

だけど、超ということばを使うときには、あるものを超えたという意味があるんですね。二つ使い方があるんですが、自然と質的に異なるものとしての啓示と言うときの超は、非連続的な別の質を示すということも、その超自然の超をですね、自然のいわば度の高まったものというふうに考えることによって、ある繋がりができる。

そうすると、岸さんが言われたように、自然と超自然が一つであるようなところを霊性というような考え方もできます。あるいは、こういうことは、どういう言い方でなければならないというのじゃなくて、ある基本的なセンスが呼び覚まされるような言い方が要求されるわけで、いろいろ考えていたら、こんな感じもしてきたんです。たとえば、よく言われることは、厳島神社の宮島は島全体がご神体なんですね。だんだん考えていくと、もっと大きな規模で言えるんじゃないかと思うんですね。たとえば、地球全体がご神体であると。こういう考え方は当然できると思います。そのときに、地球全体ということと、それがご神体だというときにですね、ただ地球というだけでなく、ご神体だというときに出てくる一つのニュアンスというものがあって、ご神体は即ち地球というものではないわけですね。そこにある質の区別をどういうものとして理解するかということだと思います。

あるいは、昨日もユングの説明のときに使われたことばだと思うんだけど、「世界」ということばと「宇宙」ということばが使われていたと思います。宇宙が一神であるとか、そういう言い方、しかし、説明の中にはある段階では世界ということばも出てきます。世界ということばと宇宙ということば、これは現在でも使われていることばだし、二つのことばを使うときにはやっぱりそのニュアンスは違っていると思います。世界という限り、これはやはり人間の世界であることですし、しかし、宇宙というときには、これは人間もそこにいるけれども、決して人間の宇宙ではないですね。もっと、人間のという、あるいは人間からという、そういう見方を翻して開かれているもっと大きな場所ということだと思うんですね。人間が住んでいる場所の、これは私の言い方になるんだけれど、二重性というか、見えない二重性ということがあって、やはり地球全体がご神体であるということが言えてくるというような感じがします。もう少し私自身のことばで、時間があれば、そこのところは説明してみたいと思います。

それから、昨日から私がある意味ではびっくりしたのはですね、これはハイジックさんだったんだけれども、仏教やキリスト教がもう結局ダメになったということがあってですね、もちろん伝統的なキリスト教がダメになったということがあって、仏教に関して、たとえば仏教からはエコロジーに関するひとつの思想が出てこなかったと。そういうことをおっしゃったと思うんです。私は、そのときにちょっとびっくりしてですね、どうしてそういうことになるのかなというふうな感じ

でしたですね。

普通は逆に言われると思うんです。仏教のもともとの考え方は、むしろそういう人間がいる場所ですね、それをただ人間の世界の中にいるというふうな考え方と違って、もっと広大な世界ですね。世界の中にいくつもの世界があるというふうな、そういう世界の中に自分がある、そういう感覚、これは基本的にあると思っている。それから、伝統の中では、そういうことからする日常の生き方の中で自然との関わりは非常に違っていたんですね。私がよく思い出す例は、石田梅岩、これは当時の高度な心学ということで、儒・仏・道の三教を一つにして日常の生活を導く、そういう趣旨なんだけれども、私にとって非常に印象的な例があります。それは、石田梅岩の家である下男が、井戸のつるべが古くなったので、そのつるべの縄を取り替えて古い縄をポンと捨てたんですね。それをたまたま石田梅岩が聞いて「どうして捨てるのか」と。そしたら、下男が「つるべが使えなくなったから」と。「しかし、つるべの縄としては使えないとしても、それは乾かして風呂で燃やしたら、きちんと使えるではないか。そして、風呂で燃やした灰は畑にやればまた生きてくるではないか」と。そういうことを教えたというんですね。そういうことは、非常に多くのことを意味している、ものとの関わりの中で人間のあり方を非常に多く意味していると思うんですね。もの自身も限りない生まれ変わり死に変わりという生命を持っていて、それは、ほとんど宇宙的な恵みになるわけですね。人間はそういうふうにしてものを大切にするということは、人間自身もそういう宇宙的な恵みを共にするということであって、そこにはいわゆるハイジックさんが言われたような意味での人間中心主義とは基本的に違った生き方が残されていると思います。

ですから、現在、仏教が機能していないというその事態は、そういう事態として認識するにして、どうしてかということについては別の考え方ができると思うんですね。私だったら、こういうふうに問題を言い換えます。つまり、仏教本来は自然に対してこれこれこういう関わりをしていたのに、現在の日本の社会は全く違ったような事態になっているのはどうしてかと。仏教がそういうことを教えていたのにも拘わらず、それが全く機能しなくなっているのはどうしてかと。そういう問題の出し方になって、そして、現在の日本の社会の成立、これは近代化ということとして一応考えられるんですが、その中で起こってきた事態というふうに考えていいんじゃないかというふうな感じがします。そういうふうに考えてみると、現代に起こっている事態ですね、現代の霊性とか、あるいは世俗の霊性ということばが使われて、どういう意味かなと思って私もお尋ねしたわけなんだけども、だんだん分かってきたんですが、私なりに理解しかねて、こういうふうなことかなと思うんですね。現代の霊性というのは、差しあったって言

えば、現代のある独特な事象の中に霊性が働いているという積極的な意味ではなくて、現代求められている霊性、おそらくそういう意味じゃないかと思うんです。

しかも、それが霊性として求められているのではなくて、むしろ霊性が欠けているところを満たそうとして、しかも霊性が欠けている間に誤ったしかたで求められているという、そういう社会かなというふうな、そういうふうに受け取ると、たとえば迷信が現代における魂のうめきであると、これはハイジックさんのことばだと思うんですが、その言い方が非常によく分かるんですね。ただ、そのとき、だからこそ、何が問題なのかですね。現代がすべて基準になるわけではないと思います。仏教、あるいは伝統的な宗教が現代に力を持たないからと言って、伝統的な宗教の方が一方的にダメになったというふうに理解はできないんじゃないかと思うんですね。

現代の方にも基本的におかしいところがある。その現代を批判できる観点、それが宗教に要求されているという面もあるというふうに思います。現代のどこがおかしいかということは、これはいろんな言い方で言える。これはハイジックさんのことばだと人間中心主義と、こう言ってもいいかと思います。しかも、単に昔流の人間の利己心とかというふうなことだけでなくて、ある手だてを持った、無制限な方法を獲得した人間の自己中心主義と、どこまで行くか分からないという、そういう人間中心主義、そういうふうな現象であって、これは、日本だけの現象ではなくて、大きく歴史的に言えば、おそらくヨーロッパの近代が出発点にあったものが近代の出発点においては歴史的な意義を持っていたものが、悪い言葉で言えば、近代のなれの果てみたいなものとしての現代ということができるかもしれない。近代が成立するときには積極的な意味を持っていた我の自覚とか、それから産業革命とか、あるいはフランス革命ですね、そういうところに働いた基本の考え方の中に、その考え方を実現していくしかたの中にですね、ある制御し難いものですね。そういうものがあって、制御し難い程の力であったからこそ近代を新しく開くことができた。これはフランス革命なんかを考えれば、よく分かると思うんですが、しかし、そのときに働いた力はですね、どこまで行くか分からない、制限できないような性質がある。そういう力を制限し得るものは、あるいはもう一度単純にまとめてしまって人間中心主義と言ってもいいですが、人間中心主義の野放図な展開を制約し得るものとしては、伝統的なことばで言えば超越と自然ということがあったと思うんですが、その超越も自然も、制約にならないようなしかたでですね、超越を塞ぎ自然を破壊するというようなしかたで、ある手だてをもって進行してきた力自身というふうに言うことができます。

以上を私のまとめとして、みなさんの発言を求めたいと思います。

（以下、省略）